助かった命 故郷で生かす

主治医にArigatou

脳の血管に大きなこぶができたネパールの女子医学生が来日、大西脳神経外科病院（明石市大久保町江井島）で約16時間に及ぶ手術を受け、一命を取り留めた。視神経が圧迫され一時は右目が失明寸前になったが、術後は後遺症もなく回復。医師になる夢に再び光が差し、自ら描いた桜の絵に「Arigatou（ありがとう）」の言葉を添えたカードを主治医に託した。8日、帰国の途に就く。

（岩崎昂志）

脳動脈瘤のネパール医学生

ネパールで医学を学ぶ大学生のマハラ・サダナさん(22)。昨年、学生同士で視力を測る実習で右目が見えにくく、同国では数少ない脳神経外科医を受診。視神経を圧迫する脳動脈瘤（こぶ）が見つかり、急激に視力が落ちた。こぶが破裂すると命の危険があるが、同国の技術や設備では手術ができなかった。

「Arigatou」と書かれたカードを手に笑顔を見せるマハラ・サダナさん（中央）と大西英之院長（左）＝明石市大久保町江井島

明石の病院で手術成功

主治医は諦めず、以前からネパールに通い医療支援を続けている大西脳神経外科病院の大西英之院長(66)に、日本での治療を打診。渡航や医療費で同病院の支援を受け、来日が実現した。

一般的に脳血管のこぶは直径5ミリ程度で破裂の恐れがある。マハラさんのこぶは3センチと危機的な状態。入院中も医学書を読みふけっては「目はどうなるの。命は。後遺症は」と不安がった。大西院長らは、マハラさん自身の腕の血管を移植する開頭手術を決断。4月上旬、視神経を避けて慎重にメスを入れ、こぶの血流を止め、血管のバイパスをつくる手術に成功した。

術後、右目の視力も少し回復。マハラさんは笑顔を取り戻し「大西先生は最高の医師。将来は自分もネパールでこんな医療を実現させたい」と目を輝かせる。大西院長は「専門医不足に悩む故郷で、多くの患者を救える人材に育ってほしい」とエールを送った。